



渡島半島東岸部と西岸部における魚名方言語彙の比較

その他（別言語等）のタイトル	A Comparison Study on Dialectal Fish Names in the Eastern and Western Regions of the Oshima Peninsula
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	66
ページ	99-116
発行年	2017-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009169

渡島半島東岸部と西岸部における魚名方言語彙の比較

橋本 邦彦^{*1}

A Comparison Study on Dialectal Fish Names in the Eastern and Western Regions of the *Oshima* Peninsula

Kunihiko HASHIMOTO

(原稿受付日 平成 28 年 6 月 24 日 論文受理日 平成 29 年 2 月 10 日)

Abstract

The purpose of this article is to classify dialect words related to fish names into two types of “Used” and “Not Used” from the viewpoint of comparison between the eastern region and western region of the *Oshima* Peninsula and to specify similarities and differences of their forms, meanings, referents, ways of use and some information to note. All the dialectal fish names are collected through the field-work in *Todohokke*, an area on the east coast, and in *Setana*, a town on the west coast of the peninsula. The comparison study will reveal what creates a variety of fish names in dialect and how they are produced.

Keywords : Fish names, Dialect, Comparison, Similarities, Differences, *Oshima* Peninsula

1 はじめに

本稿の主な目的は、渡島半島東岸部に位置する旧榎法華村（現在函館市）と西岸部のせたな町で調査した漁業関連方言語彙の中から魚の名称に関する語彙を採り上げ、使用状況を「使用する/使用していた」及び「使用しない/知らない」の二点から分類し、各語彙の指示対象や意味・用法、背景情報等の比較を行い、その共通点と相違点を特定することにある。また、この比較作業を通して、魚名方言語彙を生み出す要因とメカニズムを解明したい。

平成 26 年度科学研究補助金の交付による「渡島半島東岸部と西岸部における伝統的な漁業関連方言語彙の比較調査」（課題番号：26370523）に着手してからの 4 回に及ぶ調査で、漁具、漁法、魚加工、伝統

^{*1} 室蘭工業大学 ヒト文化系領域

行事、風・潮流などに関連する方言語彙が数多く収集された。特に、渡島半島西岸部のせたな町で実施された調査の中で、市場では広く流通していないものの、地元住民や漁師の間で以前から食されてきたもしくは食されていた魚の方言名と思われる語彙に相当数出会った。もちろん、採録された魚名の多くは、北海道の魚類を扱った図鑑や文献、市町村史で言及されているのであるが、注意して見ると、指示対象に異同や混乱が認められるほか、意味や用法に微妙なずれのあることが判明した。また、どの先行文献にも記述のない語の存在が明らかになったり、語の周辺にあるエピソード情報が調査協力者の記憶の底から呼び戻されてくる現場に立ち会う経験をした。そこで、魚の方言名称に調査対象を絞って、西岸部のせたな町と東岸部の旧榎法華村（現在函館市）双方での使用状況を調査し、共通点と相違点を特定し、その背後にある要因を明らかにする課題に取り組むこととなったのである。

実地調査は、下記の要領で行われた。

A. せたな町での実地調査

- 実施日：2014年9月4日、2015年2月26日、2016年2月27日
- 実施場所：西田栄氏宅（せたな町北檜山区新成）、大成郷土館（せたな町大成区）
- 調査協力者：西田栄氏（1925年生まれ；元漁師）、木村浩太郎氏（30代；学芸員）
- 調査者：塩谷亨、島田武、橋本邦彦（全員室蘭工業大学教員）
- 調査項目：漁具、漁法、魚加工、魚種、伝統的行事、風・潮等自然現象関連の語彙

B. 旧榎法華村での実地調査

- 実施日：2015年9月2~3日
- 実施場所：ガソリンスタンド事務室（函館市八幡町）、田中末廣氏宅（函館市富浦町）
- 調査協力者：小市光子氏（1942年生まれ；ガソリンスタンド経営）
田中末廣氏（1935年生まれ；漁師）
田中美枝子氏（1942年生まれ；漁師）
- 調査者：島田武、橋本邦彦、三村竜之（全員室蘭工業大学教員）
- 調査項目：漁具、漁法、魚加工、魚種関連の語彙

2014年9月と2015年2月のせたな町における調査で得られた語彙のうち、旧榎法華村で使用状況の確認されていないものを調査項目に載せて2015年9月に旧榎法華村で面談調査を実施した。その際に新たに調査協力者の口から言及された語彙を、今度はせたな町で確認すべく、2016年2月の調査を行った。幸い、平成23年度に採択された科学研究補助金「旧榎法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」（課題番号：23520540）の中での実地調査を通してかなりの数の漁業関連語彙が旧榎法華村において収集されていたので、これが本比較調査の基礎データとして大いに役立った。なお、この調査の研究成果の一部は、橋本(2012, 2013, 2014, 2015)、塩谷(2014)及び島田(2014)でまとめられ公刊されている。

本稿は以下で、魚の名称を、渡島半島東岸部の旧榎法華村と西岸部のせたな町で得られた調査結果を踏まえて、比較方言の視点から分析し考察していく。この研究により、橋本(2016a, b)が提案した3つの要因、すなわち生態的に条件づけられた要因、社会的に条件づけられた要因及び言語的に条件づけられた要因が、双方向的に作用し合って方言語彙が生み出される事実を明らかにしていきたい。

第2節は魚の方言語彙を、ホッケ、カジカ、イカナゴなどの魚種で語彙数の多い順に、指示対象、意味、用法等の詳細及び使用状況を見ていく。第3節では、第2節の結果の考察を行い、所見を述べる。第4節の結びにおいて、本研究の総括と今後の展望を提示する。

2 魚名称の方言語彙

澁澤(1959: 15-16)は魚名を一次的魚名と二次的魚名に分けて、各々、次のように定義した。

- 1) a. 一次的魚名：その昔、これらの魚名が付与された当時にはそれぞれ意味があったかもしれないが

現代においては特に豊富なる語源学及び方言学上の知識と正確なる音韻学的資料を用いずして
 ・ ・ ・ <中略> ・ ・ ・ これを分解しその意味を科学的に解釈しあたわぬもの。

例 タイ、ブリ、サバ、アジ、タラ、カジカなど。

- b. 二次的魚名：一次的魚名を土台として、各種の形容詞を前置して魚族の種類をさらに細かく類別したと見なさるべき魚名。

例 マダイ、チダイ、キダイ、ヘダイなど。

二次的魚名は一次的魚名と異なり、語の構成から命名の動機を知ることが可能である。澁澤(1959: 17)は、二つの命名要因を挙げている。

- 2) a. 自然状態の観察：魚類自体を観察して命名。棲息場所、形態、色彩、紋様、外見、習性・動作、発生音、魚体の部分の特徴、季節、成長度合、性別等。
 b. 社会的事象/他の事物よりの連想を基に命名。

魚名の方言語彙が関係するのは、まさしく二次的魚名において他ならない。ある特定の地域では何らかの理由である種族の魚を特によく認識しているために、その種類を細かく識別する傾向がある。澁澤(1959: 38)は、また、和学名と魚方言の違いを、次のように説明する。

- 3) a. 和学名：包括的魚名ではなく一種ごとに与えられた標準名である。種数とほぼ同数の和学名が示されており、しかもその間に重複した同魚名はない。一種一名である代わりに魚方言のごとき併称はないのが原則である。
 b. 魚方言：魚の種類に比べると魚方言を持つ種類の数はいくつもむしろ一種の魚についての方言量が多い。魚方言を基として魚類を見れば無名の魚が多くて有名の魚には併称数が多い。
 <下線部、筆者による。>

せたな町と旧榎法華村の調査でも、下線部の記述を十分に敷衍するものであった。郷土の産業を扱った市町村史にも方言辞典にも記載のないような魚名称が見出されるばかりか、指示する対象魚に混乱があったり、名称が重複したりする事態が散見された。以下では、調査協力者の回答を中心として、先行研究・資料、特に、方言辞典や魚類図鑑、関連地域の市町村史等にも目配りして、魚名称方言 56 語彙についてできるだけ詳細な記述と解説を施すことにする。

2.1 ホッケ（和学名）の方言名称

ホッケに関わる名称は 10 を数える。

- (1) アオボッケ：ToD=NU/SeT=U^[1]：表層回遊期の 5cm～18cm までの幼魚。青緑色をしている。^[2]
 (2) オーボッケ：*ToD=U/SeT=U：大型のホッケのこと。
 #1ToD（田中）：ホッケの呼び名は、大きさに応じて、大、中、小をホッケに冠する。すなわち、ショーボッケ、チューボッケ等。
 #2 ToD（小市）：上記の名称は用いない。
 (3) タラボッケ：ToD=NU/SeT=NA：特大のホッケのこと。
 #ToD（田中）：トクダイボッケと言う。
 ■木村(1997: 178)：岩礁帯に定着するネボッケは、魚体の大きさから、中ボッケ<大ボッケ<タラボッケ<特大ボッケ/道楽ボッケという異なる名称を持つ。
 (4) チューボッケ：ToD=U/SeT=U：中型のホッケのこと。
 (5) ドーラクボッケ：ToD=NU/SeT=NU：特大のホッケのこと。
 ■木村(1979: 178)：60cm 大の丸々肥えたものを指す。
 (6) ネボッケ：*ToD=U/SeT=U：大きな型のホッケのこと。岩礁に棲みついでおり、回遊しない。
 #ToD：田中氏は用いると回答したが、小市氏は使用しないとのことである。
 (7) ハルボッケ：ToD=NU/SeT=U：春に漁獲されるホッケのこと。3～6 月頃獲れる 25cm 前後のもの。

☛1『北檜山町史』(1981: 418)

☛2 木村(1979: 178)

(8) ヒガンボッケ: ToD=NU/SeT=NU: 岩礁に定着して回遊しない大型のホッケのこと。ネボッケとも言う。Cf. (6)

☛『北檜山町史』(1981: 418)

(9) マキボッケ: *ToD=U/SeT=U: プランクトンを捕食するために海面に渦を巻いて集まるホッケの群れのこと。

#1 ToD (田中): 名称としては、マキボッケのみを使い、(7) ハルボッケは使用しない。4月頃、戸井沖で渦を巻いて群がっていたが、現在は獲れなくなった。

#2 ToD (小市): 使用しない。

☛木村(1979: 178): ハルボッケと同じものを指す。

(10) ローソクボッケ: ToD=U/SeT=U: 小さくて細い型のホッケのこと。

#ToD (田中): 細くて油がない。エビかごの餌に用いる。

☛石垣(1983: 352-353): ホッケ(アイナメ科)の小型のもの。大型のものをタラボッケ、中型のものをチューホッケと言う。

旧榎法華村とせたな町双方で使用の確認された語彙は5語である:(2)オーボッケ、(4)チューボッケ、(6)ネボッケ、(9)マキボッケ、(10)ローソクボッケ。旧榎法華村でのみ使用される語彙はゼロなのに対し、せたな町だけで用いられる語彙が2語ある:(1)アオボッケ、(7)ハルボッケ。旧榎法華村でもせたな町でも使われないか使用の未確認の語彙は3語である:(3)タラボッケ、(5)ドーラクボッケ、(8)ヒガンボッケ。特に興味深いのは、旧榎法華村の調査協力者の間で使用の有無が分かれるものが3語見出されることである:(2)オーボッケ、(6)ネボッケ、(9)マキボッケ。現役漁師の田中氏ご夫妻は「使用する」との回答であったが、幼い頃から漁の様子を知っており自ら魚加工の手伝いをした経験のある小市氏は、いずれも「知らない」と回答している。漁師と地元の一般人との語彙の使用域の違いを示しているように思われる。

魚名方言語彙の命名の仕方は、澁澤(1959: 17)に記載された2)a, bに従っている。

- 4) a. 自然状態の観察: 大きさ(2), (4); 体色(1); 棲息場所(6); 習性(9); 季節(7), (8)
b. 社会的事象/他の事物よりの連想を基に命名: 他の事物よりの連想(3), (5), (10)

大きさによる名称は、旧榎法華村もせたな町も共通していて、ホッケ(和学名)の頭に大中小を付ける生産的ではあるが単純な命名方式を採っている: ショーボッケ<チューボッケ<オーボッケ<トクダイボッケ。同じ大きさのホッケを指す場合でも、タラボッケ、ドーラクボッケのような比喩的な語彙は使用しない。ただし、ローソクボッケは、比喩的命名であるが、広く使用されているようである。

旧榎法華村よりもせたな町の方が、ホッケの名称の数が多い。アオボッケはショーボッケより前の段階に位置づけられるように思われるが、市場価値はないに等しい。ネボッケとヒガンボッケのように指示対象が同じ場合、どちらか一方だけが使用される傾向が高いが、ハルボッケとマキボッケのように同じ時期に漁獲されるものでも、せたな町では両名称を使用する。もっとも、マキボッケは群れ全体を指示するのに対し、ハルボッケは魚そのものを指すと説明できないこともないだろう。

因みに、塩谷(2016: 101)で挙げられている青森県のホッケに関する方言語彙を見ると、ネボッケの他に、津軽方言として、ハルボッケ(2年もの)、ロウソクボッケ(1年もの)の記述がある。年数で区別しているのである。

2.2 カジカ科の魚の方言名称

カジカ科の魚は、淡水産と海水産のものに分かれるが(『日本産魚名大辞典』1981: 83-84)、ここで扱うのは、後者のみである。確認された語彙数は、7語である。

- (11)カワムキカツカ^[3] : ToD=U/SeT=NU : ケムシカジカ (和学名) のこと。
 #ToD (小市・田中) : 飯寿司に用いる。
 ❶『北海道の全魚類図鑑』(2011: 237) : 方言名でトウベツカジカとも呼称する。
- (12)ギスカツカ : ToD=U/SeT=U : ツマグロカジカ (和学名) のこと。
 #SeT (西田) : ギスと呼び、味噌汁に入れる。
 ❶『岩内方言辞典』(2015: 78) : ギスと呼称する。
- (13)ゴモカツカ : ToD=U/SeT=U : ギスカジカ (和学名) のこと。
 #SeT (西田) : ゴムカツカと言う。ゴムという海藻の中に棲息するため、このように言う。色がこの海藻の色、すなわち青色をしている。
 ❶『戸井町史』(1973: 900) : ゴモカジカだけではなく、チチビツカジカもギスカジカの方言名称であると説明している。
- (14)チチベツカツカ : ToD=U/SeT=NU : ツマグロカジカ (和学名) のこと。
 ❶『新 北のさかなたち』(2003: 207) : ツマグロカジカのことをギスカジカ (方言名) もしくはチチビツカジカ (方言名) と呼ぶ。
- (15)ナベカツカ : ToD=U/SeT=U : 和名不詳。ナベワリカツカと指示対象魚は同じかどうか不明。
 #1ToD (田中) : 大きい型の魚で、おいしい。@ナベワリカツカとは区別しているようである。
 #2SeT (西田) : 皮をはがさずに調理する。おいしい。
- (16)ナベワリカツカ : ToD=U/SeT=NU : ケムシカジカ (和学名) かトゲカジカ (和学名) のこと。
 #1ToD (小市・田中) : あまりにおいしいので、鍋が割れるほど争うようにして食べることから、この名前が付いた。
 #2SeT (西田) : ナベカツカと同じものを指すのではないか。
 ❶1『新 北のさかなたち』(2003: 517) : トゲカジカの方言名をナベコワシと言う。
 ❶2『北海道の全魚類図鑑』(2011: 218, 237) : トウベツカジカ (方言名) の方言名をナベコワシと言う。
- (17) ベロカツカ : ToD=U/SeT=U : ニジカジカ (和学名) のこと。
 #1ToD (田中) : チチベツカツカの別名である。
 #2SeT (西田) : 小さいカジカで、食用とはしない。
 ❶1『北海道の全魚類図鑑』(2011: 232) : 体表が粘液に富むことから、ヌルヌルカジカ (方言名) と言う。
 ❶2『岩内方言辞典』(2015: 216) : ノロカジカ (方言名) のこと。ベロは「赤ちゃんのよだれ」のこと。

旧榎法華村、せたな町共に使用の確認された語彙は、4語であった：(12)ギスカツカ、(13)ゴモカツカ、(16)ナベカツカ、(18)ベロカツカ。旧榎法華村でのみ使用される語彙が3語ある：(11)カワムキカツカ、(14)チチベツカツカ、(17)ナベワリカツカ。

両地域で発音や呼び方に若干の違いのある語彙が2語見出される：(12)ギスカツカ (旧榎法華村) ～ギス (せたな町)、(13)ゴモカツカ (旧榎法華村) ～ゴムカツカ (せたな町)。なお、ツマグロカジカをギスと呼ぶことは、『岩内方言辞典』(2015: 78)にも記載されていることから、渡島半島西岸部で広く用いられている可能性がある。文献で言及されたものと発音が若干異なる語彙も1語存在している：(14)チチベツカツカ (旧榎法華村) ～チチビツカジカ (『新 北のさかなたち』(2003: 207))。

『北海道の全魚類図鑑』(2011: 202-237)のカサゴ目の項に挙げられたカジカ科の魚は全部で54種を数える。このうち、5種の和学名の魚が、語彙項目に採録されているわけである。『日本産魚名大辞典』(1981: 83-84)のカジカの地方名 (方言名) には北海道の地名がないことから、(11)から(18)の語彙を含む『新 北のさかなたち』(2003)及び『北海道の全魚類図鑑』(2011)で言及されたカジカの地方名 (方言名) は、すべて北海道に使用域が限定されていると考えられる。この地域限定の語彙に、次に述べるような指示対象の異同や方言名称の混乱等が観察されるのである。

- 5) a. ケムシカジカ（和学名）は、(11)カワムキカツカ、(17)ナベワリカツカの他にトウベツカジカ（(11)参照）の3つの異なる方言名を持っている。
- b. ツマグロカジカ（和学名）は、(12)ギスカツカ～ギス、(14)チチベツカツカの2つの異なる方言名を持っている。
- c. ギスカジカ（和学名）には(12)の名称は適用されず、(13)ゴモカツカ～ゴムカツカに見るように、独自の方言名が対応している。
- d. ニジカジカ（和学名）は、『新 北のさかなたち』（2003: 517）、『北海道の全魚類図鑑』（2011: 232）によると、体表の粘液の多さからベロカジカと呼ばれと説明しているが、田中氏はチチベツカツカ、すなわちツマグロカジカの別名と考えている。西田氏は、「小さいカジカで、食用とはしない」と回答しているが、対象の魚がニジカジカだとすれば、雄で体長 30cm、雌で 22cm あり、決して小さくないし、かなり美味であるようである（『北海道の全魚類図鑑』（2011: 232））。ただし、ベロ（和学名）という魚もカジカ科に属し、ベロカジカと呼ばれる（『新 北のさかなたち』（2003: 517））。この魚だと体長 9cm ほどで、食用にされない（『北海道の全魚類図鑑』（2011: 233））。
- e. (15)ナベカツカと(17)ナベワリカツカが、西田氏の指摘するように同じ対象魚であるのか、小市氏や田中氏の語るように異なる対象魚を指すのか、判断の分かれる場合がある。通常、競合する2つの語彙が存在する場合、せたな町の状況のようにどちらか一方のみが使用されるように思われるが、現段階では明確な結論を下すことはできない。

なぜ、5)a-e に記述したような状況になるのだろうか。和学名で 5 種のカジカはすべて頭部が大きく、体型は比較的厚重で、背びれが盛り上がり、体表にぬめりがある、相似た外見をしている。漁獲量は少なく市場に出回りにくいが、味のよいものが多く、地元で昔から食されている。身近でありながら、種類が多く、見た目で識別しがたいのであれば、対象魚の異同等の乱れがあったとしても致し方ないのかもしれない。ただし、これはあくまで一つの仮説にすぎない。

2.3 イカナゴの方言名称

イカナゴ（和学名）関連の方言語彙は 6 語ある。

(18) オオナゴ：ToD=NU/SeT=U：イカナゴの大型のもの。

☛『新 北のさかなたち』（2003: 516）、『北海道の全魚類図鑑』（2011: 348）

(19) コナゴ：ToD=U/SeT=U：イカナゴの小型のもの。

#1ToD（小市）：ムシロで干して、函館に送った。

#2ToD（田中）：釜で煮た。現在はほとんど漁獲されない。

#3SeT（西田）：昭和 20 年代、太櫓（ふとろ）¹⁴⁾で佃煮に加工されていた。1~3 月が漁期で、網 20 カ続あった。

☛1 石垣(1983: 134)：オオナゴの 5cm くらいの幼魚。つくだ煮の原料。コーナゴともいう。

☛2『岩内方言辞典』（2015: 100）：いかなご（魚）。大きくなるに従い呼び方が「小ナゴ」→「中なご」→「大なご」と変わっていく。「小なご」は、さらに大きさにより「チリメン」「コスジ」「チュースジ」「オースジ」と呼ばれる。岩内町では言わないが、余市町方面では、「中なご」は別名「メロ」「メロド」とも呼ばれる。「小なご」は乾燥品や佃煮として食品に加工される。「中なご」は食品として加工されず魚の餌にされ、「大なご」は魚の餌や薫製にされる。

(20) チリメン：*ToD=U/SeT=U：コナゴより小さいサイズのイカナゴのこと。

#1ToD（小市）：使わない。

#2ToD（田中）：ちゃっこいコナゴのこと。

#3SeT（西田）：小さいコナゴのこと。中型のものをチューチリメンと言う。チューナゴ

とは言わない。飯寿司に用いる。オオナゴ（ナガヨとも言う）は、釜たき用で、油をとった。

(21) ナガヨ：ToD=NU/SeT=U：体長 20cm くらいのイカナゴのこと。

☛独立法人青森産業技術センターHP：メロウドとオオナゴの中間の大きさのイカナゴのこと。モグリ、モングリとも言う。

(22) メロウド：ToD=NU/SeT=NU：コナゴより大きくナゴヨより小さい型のイカナゴのこと。

☛『北海道の全魚類図鑑』（2011: 348）：紋別地方でこのように呼ぶ。

(23) モグリ：ToD=U/SeT=U：コナゴより少し大きい型のイカナゴのこと。

#1ToD（田中）：釜で煮る。モングリとは言わない。

#2SeT（西田）：コナゴの大きいものを言う。ナガヨの方を使うことが多い。

☛1『北海道の全魚類図鑑』（2011: 348）：渡島半島では砂に潜る性質からモグリと言う。

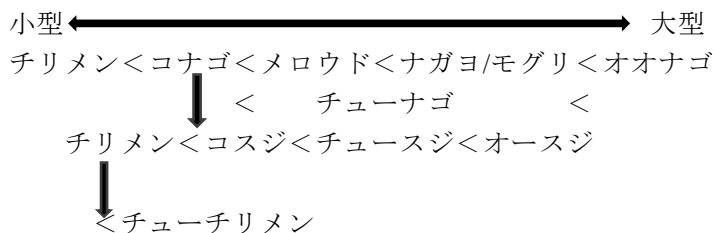
☛2 石垣(1983: 327)：コウナゴ（魚）の成長したもので、オオナゴのこと。➤採録地：南茅部。

☛3『岩内方言辞典』（2015: 241）：一般的には使われていない。

イカナゴ（和学名）を表す方言語彙 6 語のうち、旧楸法華村とせたな町の両方で使用の確認されたものは、3 語である：(19)コナゴ、(20)チリメン、(23)モグリ。これらはすべて比較的小さい型のイカナゴを指示する。旧楸法華村でのみ用いられる語彙はないが、せたな町だけの使用の見出されたものが、2 語ある：(18)オオナゴ、(21)ナガヨ。これらは、反対に、比較的型の大きなイカナゴである。旧楸法華村でもせたな町でも使用の確認されない語彙は、1 語である：(22)メロウド。これは、コナゴとナガヨの中間に位置づけられる型を指すように思われる。興味深いのは、同じ旧楸法華村でも、(20)チリメンのように、「使う」～「使わない」で意見の分かれる語彙が存在する事実である。同様の回答は、(2)オーボッケ、(9)マキボッケにも見られた。そのすべてで「使わない」回答をした調査協力者が、漁師町で育ったとはいえ一般人であるのに対し、「使う」回答をしたのが漁師であった。指示対象への関心の度合いの違いによるように思われる。

(18)~(23)からイカナゴは大きさにより、次のような区別がなされる。

6) イカナゴの大きさによる方言名称：



『岩内方言辞典』（2015: 100）によると、チリメンはコナゴの下位区分に入るようであり、調査協力者の田中氏も西田氏も、それを裏付ける説明をしてくれている。ただし、それ以上の区分はしないようである。ナゴヨとモグリを同じ型のイカナゴの呼称にしたのは、「ナガヨを使うことの方が多い。」という西田氏の言葉による。競合する語彙であるので、どちらか片方の語彙が用いられれば事足りるのであるから、旧楸法華村ではモグリのみを使うのかもしれない。また、せたな町ではオオナゴは使うが、チューナゴは使わないという。一方、『岩内方言辞典』（2015: 100）では、コナゴとオオナゴの間のサイズを指示する語彙としてチューナゴを挙げている。

塩谷(2016: 108)には、青森県におけるイカナゴの方言名称が記載されている。

7) a. 小型魚：コナゴ、コウナゴ、シラス

b. 大型魚：メロード、オオナゴ

@ただし、八戸では、シラスは幼魚を、メロードは成魚を指す。

小型のイカナゴに対して渡島半島にはないシラスの呼び名があるものの、チリメンはない。また、中型のイカナゴを指示する名称がない。この型のイカナゴに商品価値がないことに起因するのかと考えられる。

なお、旧榎法華村においてはチリメン、コナゴ、モグリ以外の語彙を用いないのは、中型及び大型のイカナゴが佃煮などの加工に適さず、社会的な関心がないためではないだろうか。

チリメンについては、せたな町でチューチリメンの呼称が報告されていることから、オオナゴ、ナガヨも含めて、旧榎法華村に比べイカナゴの名称が豊富であることが窺える。

2.4 フサカサゴ科の魚の方言名称

ソイ（和学名）、アコウダイ（和学名）を含むフサカサゴ科の魚の名称語彙は、8語である。

(24) キンシャガ：ToD=U/SeT=NA：アコウダイのこと。

#ToD（田中）：真っ赤な色の魚で、味がよい。

☛1『戸井町史』（1973: 903）：サガと発音する。

☛2『新 北のさかなたち』（2003: 180）：北海道の方言名として、コウジンメヌケ、サガ、オオメヌケ、メヌケ、メヌキが記載されている。

(25) ダッコビ：ToD=NU/SeT=U：ヤナギノマイ（和学名）のこと。

#ToD（田中）：聞いたことがない。

☛『新 北のさかなたち』（2003: 182）：方言名として、モヨ、モイ、モンキ、ダック、ダッコがあるが、ダッコビの記載はない。

(26) ナガラ：ToD=U/SeT=U：クロソイ（和学名）のこと。

#1ToD（小市）：ナガラとは「怠け者」という意味である。

#2SeT（西田）：黒い色のソイで、味がよい。

☛『北海道の全魚類図鑑』（2011: 185）：ナガラソイ（方言名）と言う。美味である。

(27) バラシャガ：ToD=U/SeT=NU：バラメヌケ（和学名）のこと。

#1ToD（田中）：大きい型のメヌケのこと。

#2SeT（西田）：メヌケはせたな町では獲れない。

☛『北海道の全魚類図鑑』（2011: 178）：方言名としてバラサガがある。

(28) ビッキゾイ：ToD=U/SeT=NU：シマソイ（和学名）のこと。

#1ToD（田中）：小型のソイのこと。ビッキは「小さい」という意味である。

#2SeT（西田）：シマソイのことはムラゾイと言う。普段は黒いが、卵を産むときに黄色になる。

@『北海道の全魚類図鑑』（2011: 187）によると、ムラゾイ（和学名はムラソイ）の方言名）はハチガラである。

☛1『北海道の全魚類図鑑』（2011: 188）：方言名として、キゾイ、モンキゾイを記す。

☛2『新 北のさかなたち』（2003: 516）：留萌地方や道南ではビッキゾイと呼ばれる。ビッキとは「カエル」もしくは「生まれたての赤ん坊」のことである。

☛3『岩内方言辞典』（2015: 201）：ビッキは「赤ん坊」のこと。この魚は道南地方に多く棲息する。

(29) マゾイ：ToD=U/SeT=U：キツネメバル（和学名）を指すと思われる。

#1ToD（小市）：鱗や色でクロゾイやナガラと区別する。

#2ToD（田中）：アオゾイとも言う。

☛『新 北のさかなたち』（2003: 516）、『北海道の全魚類図鑑』（2011: 177）：クロメヌケ（和学名）の方言名をアオソイ〜アオゾイと言う。

(30) ムラゾイ：ToD=NU/SeT=U：ムラソイ（和学名）のこと。

#SeT（西田）：名称はこの通りだが、指示する魚はシマソイ（和学名）である。

☛1『戸井町史』（1973: 903）：モンキゾイと呼ぶ。

☛2『北海道の全魚類図鑑』（2011: 188）：モンキゾイ、キゾイはシマソイ（和学名）の方言名である。ムラソイの方言名はハチガラである。

(31) モンキゾイ：ToD=U/SeT=NU：シマソイ（和学名）のこと。

#ToD（田中）：ヤナギノマイ（和学名）を指す。

☛1『新 北のさかなたち』（2003: 182）：ヤナギノマイの方言名としてモンキを挙げている。

☛2『北海道の全魚類図鑑』（2011: 188）：シマソイの方言名として、キゾイ、モンキゾイを挙げている。

旧榎法華村、せたな町双方で使用の確認された語彙は、2語である：(26)ナガラ、(29)マゾイ。旧榎法華村でのみ使われる語彙（せたな町で確認のとれていない1語彙を含む）は、半数の4語を数える：(24)キンシャガ、(27)バラシャガ、(28)ビッキゾイ、(31)モンキゾイ。他方、せたな町でだけ用いられる語彙は、2語である：(25)ダッコビ、(30)ムラソイ。

ソイを代表するフサカサゴ科の魚にも、2.2節で見たのと同じように、名称と指示対象との間に少なからぬ異同が観察できる。せたな町の調査協力者は、シマソイ（和学名）のことをムラゾイ（(28)参照）と呼ぶと回答しているが、ムラゾイとムラソイ（和学名）が同じものを指すとするなら、その方言名はハチガラである。シマソイは体が黄褐色であるのに比べ、ムラソイは黒色の地に黄色い斑点か赤褐色の斑紋が散在している。旧榎法華村の調査協力者は、キツネメバル（和学名）をマゾイと言う他にアオゾイとも呼ぶ（(29)参照）と回答しているが、後者の名称はクロメヌケ（和学名）を指す。キツネメバルの体色は黒で白いまだら模様があるのに対し、クロメヌケの全体は黄色がかった黒色をしている。両者とも体に薄い暗色体があり体型も丸みを帯び類似はしているが、区別は可能であるように思われる。(31)モンキゾイはシマソイ（和学名）の方言名であるが、旧榎法華村の調査協力者はヤナギノマイ（和学名）を指すと回答している。橋本(2016b: 141)では写真を掲げて説明しているが、2つの魚とも体は黄褐色で、側線上に暗色帯が見られる。外見が非常に類似しているのである。

魚体の特徴が命名に影響している例が存在する。(24)キンシャガは赤い体色からの命名であるが、『新 北のさかなたち』(2003: 516)によれば、キチジ（和学名）を方言名でキンキンと呼ぶのは、キン「金」が赤色を表すことに由来すると解説している。ただし、もっと一般的な名称のメヌケは、体色にではなく、大きな目に着目した命名である。(28)ビッキゾイの「ビッキ」の語源については、調査協力者と先行文献との間に相違が見られる。「生まれたての赤ん坊」にしる「カエル」にしる、その体形が小さいことから「小さい」という意味に解釈したのだろう。この大きさによる区別は、(27)バラシャガの回答においても見出せる。メヌケの種類にではなく大きさに焦点を当てて「大きい型のメヌケ」としてのコメントである。実際には、オオサガ（和学名）の方がバラシャガ（和学名バラメヌケ）よりも大きい。

(25)ダッコビと(31)モンキゾイは同じヤナギノマイ（和学名）を指し競合する名称のため、せたな町では専ら前者が、旧榎法華村では後者が用いられている。

同じ東岸部下海岸地方に位置する戸井町では^[5]、メヌケを「サガ」と発音し（(24)参照）、『新 北のさかなたち』(2003: 180)、『北海道の全魚類図鑑』(2011: 178)でもそれを支持しているのに対し、旧榎法華村の調査協力者は一貫して「シャガ」と発音していた。

最後に、メヌケの方言名称がせたな町で観察されないのは、漁獲されないという生態的な理由によるようである（(27)の回答参照）。

2.5 ナガヅカ関連の方言名称

ナガヅカ（和学名）に関わる語彙は4語挙げることができるが、指示対象魚の不明なものが混じっているため、今後調査・検討する必要がある。

- (32) **ガッジ** : ToD=U/SeT=U : 和学名不詳。旧榎法華村及びせたな町の調査協力者の説明によると、真っ黒い体に白い斑点があり、獰猛な顔で、ペロペロしていて容易につかむことができない魚とのことである。
 #SeT (西田) : 釣り針にかかると、何度も投げつけて殺して針からはずし、海に捨てる。
- (33) **ガンズ** : ToD=U/SeT=U : ナガヅカ (和学名) のこと。
 #1ToD (小市・田中) : ガンズ投げで釣る。蒲鉾の原料として用いられたが、今は獲れない。
 #2SeT (西田) : ハモ (和学名マアナゴ) のような細長い形状の魚。砂原 (渡島半島東岸部の町。現在森町) では食すが、せたな町では食べない。せたな町ではガンズではなくナガヅカという名称を用いる。
- (34) **ナガベロ** : ToD=NA/SeT=U : 和学名不詳。
 #SeT (西田) : ナガヅカより小さいが、似ている。
- (35) **ワラヅカ** : ToD=NU/SeT=NU : ナガヅカ (和学名) のこと。
 #ToD (田中) : カンズを専ら使う。干して焼いて食べる。
 ■『戸井町史』(1973: 904) : ガンズにも種類が多い。ガンズはギンポ科に属し、戸井の沿岸で釣れるものは、ムスジガジ、エゾガジ、ウナギガジ、ナガガジ、ナガヅカなどである。

旧榎法華村とせたな町の双方で使用の確認された語彙は、2 語である : (32)ガッジ、(33)ガンズ。2 つの語彙は形の類似から、一見、指示対象を同じくしているように思われる。事実、青森県のナガヅカを表す方言名称の中には、ナメ、ガジ、ワラズカと並んでガンズが記載されている。これは、(32)ガッジと語彙形態がよく似ている。ところが、旧榎法華村及びせたな町の調査協力者は、(33)ガンズは渡島半島東岸部で食用に供されるのに対し、ガッジは釣り人にとって気味の悪い厄介な魚として識別されており、両者は異なる指示対象を持っているように思われるのである。

せたな町でのみ確認され、旧榎法華村で未確認の語彙は、1 語である : (34)ナガベロ。この魚の正体が何であるのかについては、現段階ではわからない。調査協力者の証言から細長い形状がナガヅカに似ていて、「ペロ」から推して体表が粘液で覆われているものと考えられる。『北海道の全魚類図鑑』(2011: 326-340)にナガヅカの属するタウエガジ科の魚で名前の一部に「ガジ」の付く語が 11 あるが、その中に当該の魚があるのかもしれない。

どちらの地域においても「使われない」回答の語彙は、1 語であった : (35)ワラヅカ。『北海道の全魚類図鑑』(2011: 336)によると、この方言名は留萌、十勝、紋別の各地方で使われている。渡島半島の少なくとも道南部では、専ら、ガンズが用いられるようである。(35)に見るように、戸井町ではこの名称をナガヅカに限らず同種の魚の総称として用いている。

ナガヅカは食用としての利用価値が低いため、せたな町では、「ガンズ」という語彙は知っているものの、和学名をそのまま使用すると語られている ((33)の西田氏の談話参照)。旧榎法華村を含む東岸部でこの語が用いられることと対象魚を食用としていることとの間には相関があると考えられる。

2.6 ヒラメ関連の方言名称

ヒラメ (和学名) に関わる語彙は、3 語である。

- (36) **アオバ** : ToD=NU/SeT=U : ヒラメの幼魚。体長 30cm 以下のものを言う。
 ■石垣(1983: 19)、『岩内方言辞典』(2015: 17) : アオoppaと呼称する。
- (37) **ウマ** : ToD=NU/SeT=U : ヒラメの大型のもの。1m 以上になる。
- (38) **テックイ** : ToD=U/SeT=U : ヒラメ (和学名) のこと。
 #ToD (田中) : 大きい型のヒラメを言う。昔、ヒラメの頭でタコを獲った。
 ■1『瀬棚町史』(1991: 565) : 「大型のヒラメをオヒョウと呼ぶ」と記しているが、これはおそらく大鰾という字からの類推でないか。オヒョウはカレイ (鰈) の一種である。

❶2『岩内方言辞典』(2015: 161): 鋭い歯を持ち、手を齧るところからこう呼ぶ。

旧榎法華村とせたな町で共に使用される語彙は、1語にとどまる:(38)テックイ。せたな町で使用が確認されているものの、旧榎法華村で「使わない」と回答された語彙は、2語を数える:(36)アオバ、(37)ウマ。

渡島半島東岸部の旧榎法華村に比して西岸部のせたな町の方が豊富な語彙を用いるのは、漁獲量と関係しているようである。北海道でのヒラメ漁は、津軽海峡と日本海沿岸の主に水深 100m の浅い所で行われる(『新 北のさかなたち』(2003:235))。北海道東部太平洋岸ではほとんど漁獲されない(『北海道の全魚類図鑑』(2011: 383))。旧榎法華村は、津軽海峡と太平洋との結節点に位置するので、若干の漁獲はあるものの、主要な魚種ではない。一方、知内町、松前町の南部からせたな町、寿都町、岩内町の日本海沿岸部はヒラメ漁の盛んな地域である。ヒラメの棲息域が比較的浅瀬であるということだが、せたな町の調査協力者は、かつて川崎船に帆を張った打たせ漁で漁獲したとの証言をしている(橋本 2016a: 46)。打たせ漁は、根室管内尾岱沼のシマエビ漁で知られている漁法である。

(36)アオバと(37)ウマは、大きさ・年齢(幼魚か成魚か)で対立する語彙である。澁澤(1959: 17)に従うなら、前者は形状と色彩の「自然状態の観察」から、後者は馬という「社会的事象/他の事物よりの連想」からの命名である。ヒラメは成魚では、雄が約 30cm、雌が約 40cm 台で、1m を超える大型のものは稀にしか漁獲されない(『新 北のさかなたち』(2003:235))。

(38)テックイで旧榎法華村の調査協力者は大きさに着目した発言をしている。塩谷(2016: 105)によれば、青森県の方言名では、アオバ(小型)、テックイ(大型)と、やはり大きさに区別している。ただし、せたな町や岩内町を含む渡島半島西岸部ではヒラメの方言名にとどまり、大きさは関与していないようである。

2.7 イワシ、サバ、タラ関連の方言名称

2.7.1 イワシ関連語彙

次の2語である。

(39) ジャミイワシ: ToD=U/SeT=U: カタクチイワシ(和学名)のこと。Cf.『戸井町史』(1973: 898)。

#1ToD(小市・田中): 種類は区別せず、小さいサイズのイワシの総称である。

#2SeT(西田): 小さいイワシのこと。煮干し用である。

❶1 石垣(1983: 167): ジャミはジャミイワシの略で、イワシの小さいもの。ヒコイワシとも言う。

❶2『岩内方言辞典』(2015: 120): ジャミは「とても小さな魚」を指す。

❶3『新 北のさかなたち』(2003:168): 小型のサンマ(和学名)のこと。

(40) マルイワシ: ToD=U/SeT=U: ウルメイワシ(和学名)のこと。Cf.『戸井町史』(1973: 898)。

#1ToD(小市): ナナツボシとも言う。

#2ToD(田中): タラを釣るときの餌となる。

#3SeT(西田): ナナツボシは体長 20~30cm で、おいしい魚である。

❶『新 北のさかなたち』(2003:66, 515): カタクチイワシを北海道では胴体の横断面の形からマルイワシと呼ぶ。

『北海道の全魚類図鑑』(2011: 70-71)にはいずれも和学名で、カタクチイワシ、ウルメイワシ、マイワシ、サッパの4種が記載されている。(39)ジャミイワシがカタクチイワシの方言名であるとしているのは、『戸井町史』(1973: 898)と青森県上北郡(ただし、「ジャミイワシ?」のようにクエスションマークを付けて記載)だけである(塩谷 2016: 113)。旧榎法華村及びせたな町の調査協力者の発言や石垣(1983: 167)、『岩内方言辞典』(2015: 120)から推して、特定のイワシというより、小さい型のイワシすべてを指示すると捉えた方が妥当であろう。

(40) マルイワシはウルメイワシの方言名であるが、旧榎法華村とせたな町の調査協力者は全員ナナツボシのことであると回答している。『北海道の全魚類図鑑』(2011: 71)によると、ナナツボシはマイワシの方言名である。実際、この魚の体側には10個程度の斑点が並んでいるのに対し、ウルメイワシにはこの種の斑点はない。青森県でも津軽地方では、マイワシをナナツボシやヒライワシと呼ぶ(塩谷 2016: 113)。マイワシの方言名が両調査地域で指摘されていないので、混同があった可能性が考えられる。

2.7.2 サバ関連語彙

渡島半島南部津軽海峡に面する戸井町(現在函館市)からは、次の2語が報告されているので、調査を試みた(『戸井町史』1973: 899)。

(41) ヒラサバ: ToD=NU/SeT=NU: マサバ(和学名)のこと。

#ToD(田中): 小さいサバをベロサバと言う。

☛ 『新 北のさかなたち』(2003: 226): 北海道ではサバ類のほとんどがマサバである。

(42) マルサバ: ToD=NU/SeT=NU: ゴマサバ(和学名)のこと。

#SeT(西田): サバはすべて「サバ」と呼ぶ。

旧榎法華村、せたな町ともサバに関わる特定の方言名は持っていない。せたな町の調査協力者の言葉にあるように、サバは区別せずに「サバ」と呼ぶだけである。これは、マルサバに較べてゴマサバの漁獲量が少なく、あえて区別する必要がないせいかもしれない。青森県でも戸井町同様に、マサバをヒラサバ、ゴマサバをマルサバと呼称するが(塩谷 2016: 109)、後者が前者に比較して丸みを帯びた体形をしていることからの命名である。そうであるなら、2つの方言語彙は対の関係でのみ成立するものである。

小型のマサバを青森県ではジャミサバと呼ぶことが塩谷(2016: 109)にあるが、ベロサバの記載は他の文献に見当たらない。

2.7.3 タラ関連語彙

タラに関連した語彙は、3語確認した。

(43) ゴンボダラ: ToD=NA/SeT=U: 大型のマダラ(和学名)のこと。

#SeT(西田): 小さい型のはポンタラと呼ぶ。

☛ 1 石垣(1983: 141): ゴンボは泣き虫、駄々っ子のこと。ゴンボホリの略。

☛ 2 『岩内方言辞典』(2015: 104): ゴンボホリは泣き虫、駄々っ子。

☛ 3 『新 北のさかなたち』(2003: 220, 516): 留萌地方でチカ(和学名)の大きいものをゴンボチカと呼ぶ。

(44) バクダン: ToD=NU/*SeT=U: 大型のマダラのこと。

#1ToD(田中): タラの大きさによる名称は、大中小を冠するのみである。

#2SeT(木村・西田): せたな町大成区在住の木村氏はバクダンを用いるが、北檜山区の西田氏はもっぱらゴンボダラのみを使うとのことである。

(45) ドンコ: ToD=U/SeT=U: エゾアイナメ(和学名)のこと。

#1ToD(小市・田中): 深海魚である。サント(産人)が産後に食べる。焼いて身をほぐし味噌で煮る。

#2SeT(西田): たまに獲れる。炉辺で焼いて味噌煮にする。産後の女性に食べさせる。ナガベロみたいな魚である。

(43) ゴンボダラ、(44) バクダンは共にせたな町で使用の確認された語彙である。ただし、調査協力者の居住する地区によって使用語彙を異にする。どちらの語彙も先行文献に言及がない。旧榎法華村では特

別の呼び名がなく、(2)の調査協力者の発言と同様に、大中小を冠して型の区別をしている。塩谷(2016: 112)によれば、青森県においては産卵を終えたものをゴンボダラと呼び、大型のものをホンダラと称する。

(45) ドンコはチゴダラ科に属する魚で、北海道南部以南の太平洋と日本海、オホーツク海に棲息している(『北海道の全魚類図鑑』2011: 133)。旧榎法華村でもせたな町でも出産後の女性の滋養供給のために食されてきた。せたな町の調査協力者は、(34)で記したナガベロとの形態上の類似を指摘している。このナガベロはタウエガジ科のナガヅカに似ていると述べられている。確かに、背びれが小さく、尾がすばまっている点でドンコとナガヅカは、一見相似している。ただし、両者をつなぐナガベロの正体は不明のままである。

2.8 その他の魚貝類の方言名称

ここでは、上記で挙げた以外の同一魚種に属さない魚介類の方言名称を記す。

(46) オソボロスケ：ToD=NU/SeT=NU：ブリ（和学名）のこと。Cf.『戸井町史』(1973: 895)。

(47) ガサエビ：ToD=U/SeT=U：イモバラエビ（和学名）のこと。

#1ToD（田中）：稀にしか獲れないが、美味である。

#SeT（木村・西田）：棘とげした小型のエビである。北檜山区では獲れないが、大成区では獲れる。

☛1『新 北のさかなたち』(2003: 352, 519)、『岩内方言辞典』(2015: 65)：シャコ（和学名）のこと。

☛2 塩谷(2016: 114)：青森県では、アナジャコのことをガサエビと言う。

(48) カトザメ：ToD=NU/SeT=U：ネズミザメ（和学名）のこと。

#1ToD（田中）：サメはすべて「サメ」と呼び、区別しない。タコナワ漁で餌に用いる。

#2SeT（西田）：重さ 40 kg 程で、秋田県では食用にするが、せたな町では食べない。終戦後の一時期、アブラザメ（和学名はアブラツノザメ）が豊漁で、サメ油をとった。

☛1『戸井町史』(1973: 895)：カトザメもしくはモウカザメと呼ぶ。

☛2『岩内方言辞典』(2015: 72)：カトザメと記載されている。

☛3 塩谷(2016: 107)：青森県ではモウカ（ザメ）、モウガ（ザメ）、カド（ザメ）などと言う。

(49) キナンボウ：ToD=U/SeT=U：マンボウ（和学名）のこと。

#SeT（西田）：知ってはいるが、あまり使用しない。噴火湾に多い。せたなでは、2 回くらいしか見たことがない。

☛『戸井町史』(1973: 901)：鹿部あたりでは好んで食べるが、戸井ではあまり食べない。

(50) ゴンタ：ToD=U/SeT=U：小型のクロマグロ（和学名）のこと。体重 20 kg のメジ（方言名）よりもやや大きいものを指す。

☛1『北海道の全魚類図鑑』(2011: 376)：クロマグロの方言名としてメジ（若齢魚）は挙がっているが、ゴンタの記述はない。

☛2『岩内方言辞典』(2015: 103)：ゴンタマグロと呼ぶ。

☛3 塩谷(2016: 109)：青森県におけるクロマグロの呼び方は大きさ（重さ）に応じて細かく分かれている：コシビ（小型）、メジ（小型）＜シビ、クロ、ゴンタ（5~10 kg）＜マグロ（15~30 kg）＜ホンマグロ（30 kg 以上）

(51) シルケ：ToD=U/SeT=U：カラスガイ（和学名）のこと。

#1ToD（田中）：カレイ釣りの餌に使用する。

#2SeT（西田）：貝の一種。マハゴの大きいもので、海底にいる。焼いて食べるが、美味である。

(52) トトグチ：ToD=NU/SeT=NU：ウミタナゴ（和学名）のこと。Cf.『戸井町史』(1973: 897)。

#SeT（西田）：タナゴと呼ぶ。焼いて出汁にする。

☛塩谷(2016: 108)：青森県のウミタナゴの呼び名は多彩である：タナゴ、ススケタナゴ（大型）、ニセコ（小型）、マルタナゴ、ザイコタイ。トトグチに対応すると思われるのは、オキタナゴ（和学名）の名称である：トウグチ、トグジ（タナゴ）、トグチ、ナガタナゴ。ウミタナゴもオキタナゴも北海道以南の日本各地で漁獲される（『北海道の全魚類図鑑』（2011: 297-298）参照）。ウミタナゴの方が丸みを帯びた体形をしていて、煮つけ、塩焼き、フライで食されるのに対し、オキタナゴは商業的価値が低いようである。

(53) ハゴドコ：ToD=U/SeT=U：スジアイナメ（和学名）のこと。

#1ToD（田中）：ハマンドコと言うこともある。アブラコに似ている。

#2SeT（西田）：磯釣りで上がる魚である。出汁にする。

☛『岩内方言辞典』（2015: 193）：一般的に使われていない。漁業関係者の間でのことばであろう。

(54) ババガイ：ToD=NA/SeT=U：ウバガイ（和学名）のこと。

☛『新 北のさかなたち』（2003: 304, 519）：北海道ではウバガイは和学名で呼ばれず、ホッキガイ、ホッキである。

(55) ハモ：ToD=U/SeT=U：アマナゴ（和学名）のこと。

#1ToD（田中）：はえ縄で獲る。黒くて細長い体形の魚。三枚におろして干す。白いハモをマハモと呼ぶ。

#2SeT（西田）：せたなでは漁獲されない。

☛1『戸井町史』（1973: 898）、『新 北のさかなたち』（2003: 54）、『北海道の全魚類図鑑』（2011: 68）に記載されている。

☛2 塩谷(2016: 100)：青森県ではマアナゴのことをハムまたはハモと呼び、ハモ（和学名）をハモまたはアナゴと言う。

(56) マメフグ：ToD=NU/SeT=U：和学名不詳。

#ToD（田中）：フグはすべて「フグ」と言う。

☛1『戸井町史』（1973: 904）：マメフグの他にナメラフグ（方言名）が記載されている。

☛2『新 北のさかなたち』（2003: 284）：マフグ（和学名）をナメラフグと呼称する。

全 11 語彙中、旧榎法華村及びせたな町の双方で使用の確認された語彙は 6 語で、おおよそ半数であった：(47)ガサエビ、(49)キナンボウ、(50)ゴンタ、(51)シルケ、(53)ハゴドコ、(55)ハモ。ただし、せたな町の調査協力者によると、(49)キナンボウと(55)ハモはせたなの海では漁獲されないので、知ってはいるがあまり使わないとのことであった。

旧榎法華村でのみ使用される語彙は、今回の調査では見つからなかったのに対し、せたな町でだけ確認された語彙は 3 語あった：(48)カトザメ、(54)ババガイ、(56)マメフグ。このうち(54)ババガイは、旧榎法華村で使用の確認がなされていない。両方の地域で使用されない回答の語彙は、2 語である：(46)オソボロスケ、(52)トトグチ。

ガサエビは、どの文献にもシャコの方言名と記されているが、橋本(2016a: 47)が述べるように、江差町やせたな町など渡島半島西岸部では、棘の多いイモバラエビを指している。また、2015 年 9 月の調査で、東岸部旧榎法華村の調査協力者も、このエビをガサエビと呼んでいることを確認した。どちらの地域の調査協力者も、シャコは漁獲されないと証言している。

キナンボウやハモが、せたな町での使用頻度の低いのも、東岸部と比較して、あまり獲れないばかりか、食べる習慣もないせいであると考えられる。この漁獲量の少なさと食習慣の欠如から生じる関心度の低さは、東岸部旧榎法華村においてカトザメ、トトグチ、マメフグが使用されないことと相関があるように感じられる。これらの語彙は、同じ下海岸に位置する戸井町では、その使用が報告されている。

ウミタナゴをせたな町ではトトグチではなくタナゴと呼ぶのは、塩谷(2016: 108)の記載に見る通り、方言名と認定できる。この魚は、せたな町の調査協力者によれば「焼いて出汁にする」利用価値がある。

ウバガイの方言語彙ホッキは、北海道全域で使用が確認されるが、ババガイという呼び名は、現段階では、せたな町に限られている。和学名との音の類似は、ウバガイ＝ババガイの方がウバガイ＝ホッキガイより近似している。カラスガイを指示するシルケは、東岸部と西岸部で使用が確認されているが、先行文献にはこの語彙の言及が見当たらない。餌や食用など、利用価値はあるようである。

3 考察

第2節では、渡島半島東岸部の旧榎法華村及び西岸部のせたな町で使用状況の確認調査がなされた56語彙について、調査協力者のコメントや先行文献の関連箇所を随時引用しながら、特定の魚種ごとに記述していった。取り扱った魚の多くは漁獲量が少ない、鮮度を保ち難い、商品価値が乏しい等の理由であまり市場に出回らず、専らごく限られた地域もしくは漁師の家庭のみで消費されるか、他の魚の餌として利用されてきたために、多様で錯綜した方言語彙を持ち合わせている。その点を踏まえた上で、次の8点を指摘することができる。

- ① 漁獲量が多く食用に適していたり魚粕の原料など商品価値のある魚は、社会的関心が高く、幼魚か成魚か、型の大小、漁獲時期等に基づいて、指示対象の細かく分かれた方言語彙を有する傾向がある。
例：ホッケ
- ② 比較的種類が多いけれども漁獲量が限られているため地元で消費される魚の方言語彙は、その数がたくさんあるばかりか、指示対象にしばしば混乱が見られる。
例：カジカ科の魚、ソイ、メヌケ、メバルを含むフサカサゴ科の魚
- ③ 商品として利用し得る範囲によって、方言語彙の使用状況に相違の出る魚がある。
例：イカナゴの小型のものはコナゴを筆頭にチリメン、モグリと言うが、旧榎法華村でもせたな町でも使用が確認されている。小さいイカナゴは釜で煮て干したり佃煮に加工するので、商品としての価値が高い。一方、大きい型のは旧榎法華村では利用していないのに対し、せたな町を含む、ナガヨ、メロウド、オオナゴの語彙を使用する地域では、魚の餌や薫製などに用いている。
- ④ 漁獲や消費の有無の分かれる魚には、方言名で呼ばれる地域と、方言名を持ち合わせないか和学名で呼称する地域とがある。
例：キナンボウとハモはせたな町では漁獲されないか滅多に獲れないので、あまり使用しない。同様に、カトザメやトトグチ、マメフグは漁獲されないか消費されないので、旧榎法華村では用いられない。ガンズは東岸部の太平洋側で食されるのに比べ、西岸部のせたな町では獲れはするが食することはないので、和学名のナガヅカをそのまま使用する。
- ⑤ 指示対象魚の大きさに関与するのかどうか疑問の残る方言語彙が存在する。
例：テックイは大きいという属性を持つのか、大きさに関しては中立で単にヒラメ一般を指す方言語彙にすぎないのか。ジャミイワシは『戸井町史』(1973: 898)によるとカタクチイワシを指示するが、調査協力者の説明のように魚種に関係なく小型のイワシの総称名であるのか。小さいサバをベロサバと呼ぶとされるが、ベロカツカは小さいだけでなく体表のぬめりも合わせた特徴を持つ魚である。語彙の前半を構成する「ベロ」の意味が「赤ちゃんのよだれ」であるとする、赤ちゃんとの連想からぬめりだけではなく小ささにも焦点が当てられているのだろうか。もしそうであるなら、小型のサバにも特徴的なぬめりがあるのだろうか。
- ⑥ 当該地域で漁獲されないが形状の似ている魚は、その和学名が転用されて方言語彙となる場合がある。
例：ハモ（和学名）は渡島半島海域では漁獲されないが、細長い形状で類似したマアナゴ（和学名）がハモ（方言名）で呼ばれる。本稿では触れていないが、マダコ（和学名）は獲れないが、主要魚種のミズダコ（和学名）の雌をマダコ（方言名）と呼称する（橋本(2016a: 44)、橋本(2016b: 130)）。因みに、ミズダコの雌は雄（方言名はソーダコ）に比較して体は小さいが、美味で、高値で取り引きさ

れる。

- ⑦ 漁師と一般人との間で方言語彙の使用域に相違を示す場合がある。

例：旧楢法華村で現役漁師の田中氏夫妻はネボッケ、マキボッケ、チリメンを使用すると回答したが、ガソリンスタンドの経営者の小市氏は、知らない、使わないと答えている。せたな町の元漁師の西田氏は大型のマダラをゴンボダラと呼ぶと言っているが、郷土館学芸員の木村氏はバクダンを使うと述べている。後者は、おそらく形状が爆弾に似ているので命名されたと考えられるので、方言名というより、たとえば釣り仲間で用いられるジャーゴン(jargon)の可能性もある。ただし、ハゴドコの『岩内方言辞典』(2015: 193)からの引用にあるように、一般的に使われていない漁業関係者の間のことばが、地元の一般人にも普及して使用が定着することにより方言語彙が成立すると考えられるのではないだろうか。

- ⑧ 調査地域に特有と思われる次の方言語彙が見出された：(15)ナベカツカ、(24)キンシャガ、(25)ダッコビ（ダッコではない）、(32)ガッジ、(34)ナガベロ、(36)アオバ（アオoppaではない）、(44)バクダン、(47)ガサエビ、(51)シルケ、(54)ババガイ、(55)マハモ（白いハモのこと）。

橋本(2016b: 143)では、方言語彙を生み出す要因として、次の3つを挙げている：

- A. 生態的に条件づけられた要因(Ecologically-Conditioned Factors)：風や潮流、地形や地理上の位置等の地勢的特徴、棲息する魚種などの自然条件に関わる要因。
- B. 社会的に条件づけられた要因(Socially-Conditioned Factors)：漁具や漁法の変遷、魚加工や食習慣、伝統行事や風習など、地域共同体における人間の営みに関わる要因。
- C. 言語的に条件づけられた要因(Linguistically-Conditioned Factors)：言語接触や借用、類推、拡張、転用、比喩等言語に関わる要因。

これら3つの要因は、比較方言学の観点から、双方向的な相互関係で作用すると考えられる。

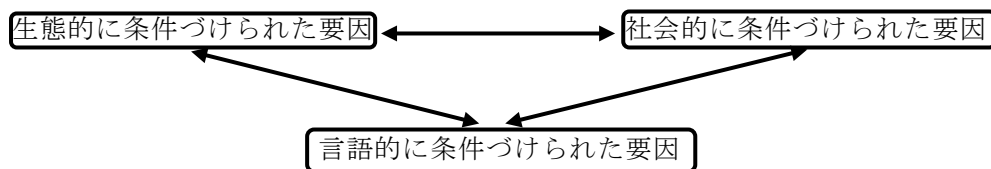


図1：3つの要因の相互作用

本研究で明らかにされた①～⑧の事項は、漁獲される魚種（要因 A）、食用や魚加工への利用価値（要因 B）、語彙の転用や比喩（要因 C）の相互関係が方言語彙の成立に関与していることを指摘している点で、図1の妥当性を支持している。今後、魚の名称だけではなく、他の漁業方言語彙に視野を広げること、さらに3つの要因の相互作用と語彙の成立のメカニズムを解明できるであろう。

4 結び

澁澤(1959: 67)は、先駆的で優れた魚名の研究の中で、魚名が伝播する条件として、「経済的または社会的」条件と「自然的条件」を挙げている。また、「人と魚の交渉が地方的にまちまちであり……＜中略＞……地方的にも特定の魚についてその特徴を認識する観点を異にした時に採用する語彙を異にし従って各種の魚名を生ずることが多い。」と述べている。渡島半島の東岸部と西岸部という比較的狭い地域でありながら、対馬海流の流れる日本海側と千島海流の流れる太平洋側、さらに両海流のぶつかる津軽海峡恵山岬沖周辺の魚種名を比較の視点から見ると、まさに澁澤(1959)が語るように漁獲魚種という生態的要因と魚の特徴を認識するという社会的要因が絡み合って、魚の方言名が決定されていく

のである。さらに、該当する魚種が棲息しない場合でも、同種とか近似種に関係なく、単に形態の類似や経済的価値の高さという社会的評価の同等性から、異なる魚に同じ呼称を付けて、それが方言名として定着する場合があることも事実なのである。本研究の寄って立つ比較方言的視点によって、近接した地域にあっても方言名の違いや指示対象のずれ、評価の相違のあることが判明した。この比較研究の領域を、漁業という産業と方言という言葉のつながりが指摘されている、津軽海峡を隔てた青森県の方言語彙をも対象に組み入れるならば、漁業方言語彙の分布と伝播および成立の実相と解明に、より一層迫ることができるだろう。

魚種方言名をできるだけ数多く収集し、使用実態に基づく語彙表を作成しデータ化する作業を通して、澁澤(1959)や塩谷(2016)で考察されてきた魚種方言語彙の構成メカニズムや類型研究にも新たな展開が期待できる。本研究がその端緒としての役割を果たせたのであれば、うれしい限りである。

謝辞

本研究は、平成26年度科学研究補助金（課題番号：26370523）の交付による「渡島半島東岸部と西岸部における伝統的な漁業関連方言語彙の比較調査」における研究成果の一部を公にしたものである。調査に辛抱強く協力して下さったせたな町在住の西田栄氏、木村浩太朗氏、並びに、旧楳法華村（現在函館市）在住の小市光子氏、田中末廣氏、田中美枝子氏に、心からの御礼を申し上げたい。なお、記述内容の不十分な箇所や誤り等の責任は、筆者ひとりに帰すものである。

注

[1] 省略記号は、次の通りである。

ToD: 旧楳法華村、SeT: せたな町、U: Used、NU: Not Used、NA: Not Attested、*: 回答の分かれるもの、#: 調査協力者のコメント、●: 文献からの引用、@: 筆者のコメント

[2] 基本的な語義は、調査協力者より得た情報と参照文献中に記載された説明に共通する部分を筆者自身がまとめたものである。ただし、文献中に記されていないものについては、専ら調査協力者により提供された情報に依っている。

[3] 調査協力者の発音に従った。

[4] 地名。せたな町中央部に位置し、鵜泊港を有する。

[5] 下海岸地方は、函館から見て東側、恵山岬付近までの海岸部を指し、旧楳法華村、旧恵山町、旧戸井町（3町とも現在函館市）に至る地域の総称である。本稿で言及する渡島半島東岸部と重なる。

文献

尼岡邦夫・仲谷一宏・矢部衛、『北海道の全魚類図鑑』，北海道新聞社，2011.

石垣福雄、『北海道方言辞典』，北海道新聞社，1983.

北檜山町史編集委員会、『北檜山町史』，北檜山町，1981.

木村盛武、『北の魚博物誌』，北海道新聞社，1979.

見野久幸・阿部典英、『北海道海岸方言 岩内方言辞典』，饗文社，2015.

塩谷亨，道南方言とハワイ語における水産物語彙について，北海道言語文化研究，第12号，2012，p. 33-42.

塩谷亨，青森県における魚類等の方言名について，北海道言語文化研究，第14号，2016，p. 93-118.

澁澤敬三、『日本魚名の研究』，角川書店，1959.

島田武，楳法華方言における「潮」、「塩」の発音について—一個人語のレベルでの一事例—，北海道言語文化研究，第12号，2014，p. 25-32.

瀬棚町史編纂委員会、『瀬棚町史』，瀬棚町，1991.

地方独立行政法人青森産業技術センター水産総合研究所ホームページ，<http://www.aomori-itc.or.jp>，2015年

3月13日最終閲覧.

戸井町史編集委員会,『戸井町史』,戸井町,1973.

日本魚類学会,『日本魚名大辞典』,三省堂,1981.

橋本邦彦,渡島半島東岸部の漁業関係の語彙,北海道言語文化研究,第10号,2012,p.23-37.

橋本邦彦,渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について,室蘭工業大学紀要,第62号,2013,p.69-80.

橋本邦彦,榎法華村における「風」及び「潮」・「波」に関連した方言について,北海道言語文化研究,第12号,2014,p.3-23.

橋本邦彦,榎法華村における「漁具」、「漁法」、「魚種」、「魚加工」に関連した方言語彙について,室蘭工業大学紀要,第64号,2015,p.85-97.

橋本邦彦,渡島半島西岸部せたな町の漁業方言語彙～東岸部旧榎法華村との比較の視点から～,室蘭工業大学紀要,第65号,2016a,p.41-52.

橋本邦彦,渡島半島東岸部旧榎法華村の漁業方言語彙について～西岸部せたな町との比較の視点から～,北海道言語文化研究,第14号,2016b,p.119-145.

水島敏博・鳥澤雅,『新 北のさかなたち』,北海道新聞社,2003.